

Title	ユーゴスラビアの都市(下)
Author	小林, 博
Citation	人文研究. 27 卷 1 号, p.38-52.
Issue Date	1975
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	藪内芳彦教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

ユーゴスラビアの都市 (下)

小林 博

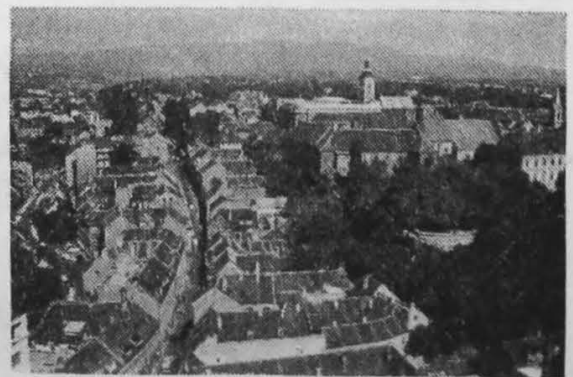
Ⅵ 中心商店街の形態と業種構成

本号では中心商店街についてふれることとする。ユーゴは社会主義の国であるから商業経営も自ら資本主義の国とは異なる。しかし、5人以上が組合を組織して企業を営むのは可能であり、それぞれは自由に競争している。

その限りでは西欧や日本とも共通の性格をもつ。中心商店街の範囲をいかに画定するかは問題の残るところであるが、ここでは店舗の規模、外観や連続性、それに歩行者量などを指標に、建物の1階部分を対象として、観察によってきめた。したがって厳密な画定ではないことを断っておく。

1) 位置と形態

まず各市における中心商店街の位置をみると、サグレブでは前述のように共和国広場に接してその西側のイリツア通りにある。ここは市街を貫く幹線道路の一部である。幹線道路は共和国広場を貫通するが、広場から双方に商店街が発達せずに西側だけにできたのは、市街地の形成過程と関係があると考えられる。すなわち、このイリツア通りは段丘崖下を通る近世の主要街道で、それ以前の旧市街は段丘上のグラデクとカプトルの2つの核にあり、これが一体化してかつ段丘崖下にも拡大した当時に成立した。したがって2つの核を連絡する機能をも有していた。遠隔交通路であるとともに市内の主要軸であったことが中心商店街成立の背景に存在した。いわばこの中心商店街の位置は歴史的意味をもった位置といえるであろう。中心商店街の形態は広場プラス直線路で、ドイツ、オーストリアの諸都市と同じである。しかし、イリツア通りの南側の店舗はところどころ通りと直角の



ザグレブの中心商店街

方向に小路をもち、その両側に店舗がある。小路は建物内の通路で露天ではない。共和国広場付近はビルの聳立する近代的な街区をなすが、西するに従って在来のクロアチア的家屋列に移行し、店舗形態も小規模となる。

連邦共和国の首都ベオグラードの中心商店街は、共和国広場を中にはさんで、クネザミハイロバ通り—テラジエ広場—マーシャルチト—通りの一帯である。クネザミハイロバ通りはほぼ方格地割をなす近世市街域の中心軸で、共和国広場は近世市街域のはしにあり、そこから南方は地割を異にする近代以後の市街地となる。マーシャルチト—通りはこの近世以後の新しい市街地域のなかの大通りで、官庁街へ至る革命通りを分派する。こうしてみるとベオグラードの中心商店街は歴史的な古い通りとその延長上の新しい大通りとの合成であるといえる。この中心商店街合成は、地形的には、市の起源をなすドナウ川河岸の段丘端にあるカメレグダン要塞から除々に南方に高くなる斜面の稜線にあたる。このことが中心商店街成立を有利に導いたとみられるが、さらにその発展にはこの稜線上でかつ近世市街のはしにあたる地点に共和国広場が設けられ、ここが市内交通のターミナル的機能をもつに至ったという事情が加わっている。クネザミハイロバ通りの方は狭く歩行者専用路となっており、他方マーシャルチト—通りは電車の通る近代的大通りで、広い歩道と街路樹をそなえている。テラジエ広場は図のように四本の道路が集まるマーシャルチト—通りよりもやや幅の広い個所で Strassen Markt 的な性格を有する。

サラエボの場合は、ミスキーナ通りとその西方に連続するマーシャルチト—通りの西半部が中心商店街にあたる。

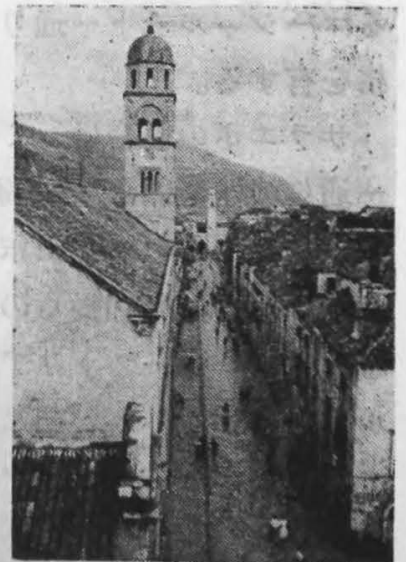
前述のようにサラエボの市街はトルコ時代の地区からミリヤッカ川ぞいにしだいに西方へ細長くのびた。これに対応してトルコの市場から中心商店街も西漸し、オーストリア時代にはミスキーナ通り、さらに近年ではマーシャルチト—通りへとこのびた。マーシャルチト—通りのみ電車が通じ、昼夜の歩行者の動きからみてもマーシャルチト—通りの方に重心が移行しつつあるように見える。トルコ時代の商業中心地だったバシチャルシア付近は今も広場に露天市が出ているが、その販売品は雑貨布地のほか銅器、皮革製品を主とした土産物が多く、観光客がおもな対象であるように判断された。モスタールの場合もサラエボと同様トルコ時代の商業中心から商店街が市街の拡大方向に北漸している。トルコ古橋の付近には鉄扉をもつ銅細工の店がみられるが観光客相手の土産物店がめだち一般の商店は少ない。その地に連続する商

店街はネレトバ川と平行する通りで回教寺院が点在するなかであり、店舗も古い形態を止め、バザールや広場との関連が深い。通りの長さの割合には商店の集中度が弱く迫力がない。これに対してその他の新しい商店街は計画的なものでホテル、広場と結合し各店舗はコンパクトに整備されている。しかし通りの長さは短い。

ノビサドの中心商店街は、スロボデ広場 Trg Slobode とそれに隣接する第2次大戦前の商店街、および戦後再開発によって造成された商店街からなる。その位置は19世紀以来の都心部で変動がない。スロボデ広場は後述のように役所、教会、ホテル、商店、レジャー機能が混在する都心ともいえるもので純粋の商店街ではない。この広場から派出する通りの1つに戦前の商店街がある。その長さは約200mほどで短かいが店舗が凝集し、人出が多いのが注目される。店舗は2階建の家屋で、1棟3ないし5に分割され中央1階部分に奥へ入る通路がある。分割された各区画が1店舗をなすので各舗の間口はほぼ均等で、店舗規模に格差が少ない。看板、照明、展示などにはそれほど意が用いられておらず、いわば露天市の各店舗が常設化したことによって成立したという感がする。これに対して再開発された商店街は3～4階の建物の1階部分を店舗としたもので、日本の中都市における不燃化対策をした市街地改造の商店街と似ている。しかし規模は小さい。またこれと連続するマーシャルチトー通りは6～8階のビルで、その1～2階部分に店舗がある。ここでは間口も広く全く近代的なセンスの盛込まれた形態をとるが、ビジネス機能との混在が目だつ。しかし、ノビサドの都心部はなお再開発中で、これが完成しないと全体としての性格は論ぜられない。ただいえるのは新旧商店街が並存し、新商店街の方は他機能との混在がみられることである。

新旧商店街の並存を小規模な形で完成しているのはボイボダイナ地方の東南部にあるブルシヤッチの場合である。ここでは旧広場のまわり

に石造2階建の商店街があり、それに接して市庁舎、新しい広場、これを取りまくいわゆる下駄ばきビルがみられる。



デュブロブニクの
中心商店街

プリットがある。デュプロニクは前述のように市街地が北西へ狭長な形で拡大したものの、都心部はいまなお城壁で囲まれた中世都市内にある。表門 Pile Gate から港まで城内を貫く通りプラッア Placa が代表的な中心商店街をなす。この通りは中世以前の小瀬戸を埋立たもので、その名のとおり通りすなわち広場の機能をもつ。長さは約 300m にすぎないが約 50 余の店舗が並び、人通りがたえない。しかしこの商店街の基盤は地元の需要と世界各地から集まる観光客の需要に対応するもので、二重の性格をもち、むしろ観光客を対象とする商店街のウェイトが高い。そのため裏通りには補完的な役割を果たす商店街があり、業種の地域的分化が進んでいる。市域全体からみた位置は南に偏在するが、表門前の広場が電車の起（終）点をなし、交通網のうえではさほど不利な立地ではない。通りの両側は海よりの中央部を除いて、3階建の家屋が通りと直角方向に並んでおり、各店舗はそれらの家屋の妻の部分にある。通りの両端にはそれぞれ広場があり、南端には旧政庁が位置し、中世都市の中心軸の構造が今日もそのまま残されている。



スプリットの国民広場

スプリットの中心商店街も中世都市のなかにあるが、その形態はベニスの影響を受けて国民広場を中心に不規則な街路型を示す。家屋は古い構造のままで各店舗の間口も狭い。隣接して古代都市ディオクレティアヌスの宮殿があるため観光客も多く、商店街の基盤はデュプロニク

と同様、地元と観光客の 2 つにある。これと関連して海岸通りに面するディオクレティアヌスの宮殿の城壁には主として観光客を対象とする小さい店舗が並ぶ。近代的な体裁をもつ新しい店舗は中世都市域に接する北側の通りにみられるがまだ中心商店街を形成するまでには至っておらず、人通りも多くない。バスターミナルは海岸に面した中世都市域の南西端にあり、市内および郊外からバスでくる人が多い。またすでにのべたように中心商店街と反対側の宮殿城壁ぞいには野菜、花、土産物などの露天市が開かれ、最寄品の購買と買回品の購買とがともに容易である。露天市と中心商店街の結合はスイスやドイツの諸都市（たとえばベルン、ボン、ミュンスターなど）でもみられるが、日本にはさほど多くはない。

リエーカでは中心商店街が中世都市域の外縁、海岸通りとの中間に海岸に

並行して存在する。この中世都市域は不良化して目下再開発中である。中心商店街はおそらくオーストリアーハンガリー時代に中世都市域を避けて設けられたもののようで、通りの北西端には長方形の広場があり、その周辺はビルが多く業務機能が卓越している。電車は商店街に平行して一筋海岸よりの通りを走り、市内各地から商店街への来集は容易である。また近くのザビツァ広場 Trg Zabica にバスターミナルがあり、郊外からの人びとも訪れやすい。

以上を整理すれば表1のごとくなる。要するに①一般に中心商店街は広場と結合しているのがほとんどである。広場を明記しなかったデュブロブニクの場合でも表門を入ったところにミリツェビイツァ広場 Milicevica がある。これは規模が小さく今日の水準では広場というほどのものではないが、中世都市のレベルでは広場である。これを含めるとすべてが広場と結合しているといえる。しかし、広場のもつ機能は同じではなく、ザグレブ、ベオグラード、ノビサド、スプリットは市民の集まる繁華街的性格をもつ伝統的な中心をなすのに対し、サラエボは市場的性格のみであり、モスタールは多くの広場があり、そのうちもっとも新しい広場が中心性をもつ、リエーカでは通りが広いせいもあって広場のもつ求心性が弱い。②商店街の景観は成立の時期と背景となる文化で異なる。とくに近世+近代の商店街ではその相異が顕著である。③しかし、1棟即1家屋即1店舗ではなく、1棟が3ないし5に分割され、その中間に奥へ入る入口の部分があり、これが商店の連続性を妨げる姿は、モスタールの場合を除いて共通である。④日本のようなバー、

表1 各中心商店街の比較

都市名	形態	成立時期	歩車区分	長さ
ザグレブ	広場+直線型	近世	歩, 車, 電車	約 700m
ベオグラード	"	近世+近代	一部歩行者専用車, 電車	600m
ノビサド	広場+鍵型	近世+近代	歩, 車	300m
サラエボ	広場+直線型	近世+近代	一部歩行者専用, 一部, 電車	600m
モスタール	広場+鍵型	"	歩行者専用, 一部歩車	500m
デュブロブニク	直線型	中世	歩行者専用	250m
スプリット	広場+網状	中世	歩行車専用	最長路 200m
リエーカ	広場+直線型	近世	歩行者専用	500m

カフェ、小飲食店の集在はさすがに見当らないが、ザグレブやベオグラードの段階の都市では中心商店街の背後にやや似た機能の付随がみられる。⑤鉄道駅の立地が何らか中心商店街の発展方向に影響を及ぼすといった傾向はみられないなどの特色があげられる。

2) 業種構成と店舗配置

各商店街の業種構成は表2のとおりである。概して衣料品、身辺細貨が第1位を占めるがその比率は都市によって若干異なる。ベオグラードでは洋服をはじめ衣料品が24.5%を占め、靴・カバンを加えると38.1%となる。ついで文化品、食料品の順であるが、文化品の占める割合は8市中最大である。ザグレブもほぼ同じ傾向を示し、2大中心の姿が伺われる。しかし飲食店の割合はザグレブの方が高く、混在度が大である。サラエボでは文化品、雑貨品の比率が低く、その分だけ衣料品の比率が高い。また飲食店の混在が少ないのが注意される。これに対してスプリットとデュブロブニクでは、食料品や日用品の店舗が近くにあつて、その影響が強い。ノビサドは著しく衣料品の占める割合が高く45%にも達する。日本の場合と比較すると、都市規模にもよるが一般に靴・カバンの比率が高く、食料品店の比率が低い。

各市の具体的な店舗配置はつぎのごとくである。まず、ベオグラードでは中心商店街が前述のように、クネザミハイロバ通り、共和国広場とテラジエ広場、マーシャルチトー通りからなり、店舗配置もそれぞれ特色がみられる。近世市街地域内のクネザミハイロバ通りは歩行者専用の商店街で、やや大きい紳士服、婦人服の専門店4をはじめ、服地店6、洋品雑貨3、靴4、カバン4、時計眼鏡3など中心商店街を象徴する店舗が並び、その他に家具、薬局各1、本・文具4、化粧品3、冷蔵庫・ミシン・電気機器2、ガラス製品・瀬戸物1、百貨店2などがあり、業務機能の事務所はエールフランスほか



ベオグラードテラジエ広場

2計3がある。各店舗の配置は混在ではあるが、衣料品関係は旧市街の中央に近い北西部に、靴・カバン、百貨店はその反対側共和国広場に近い南西部にややかたまっている。早くから成熟した商店街であるためか、変動が少なく改造中のものは1店だけであり、かつレストラン、喫

表2 中心商店街の業種構成〔1969.9. 筆者の調査 京都(1958)は木地節郎による〕

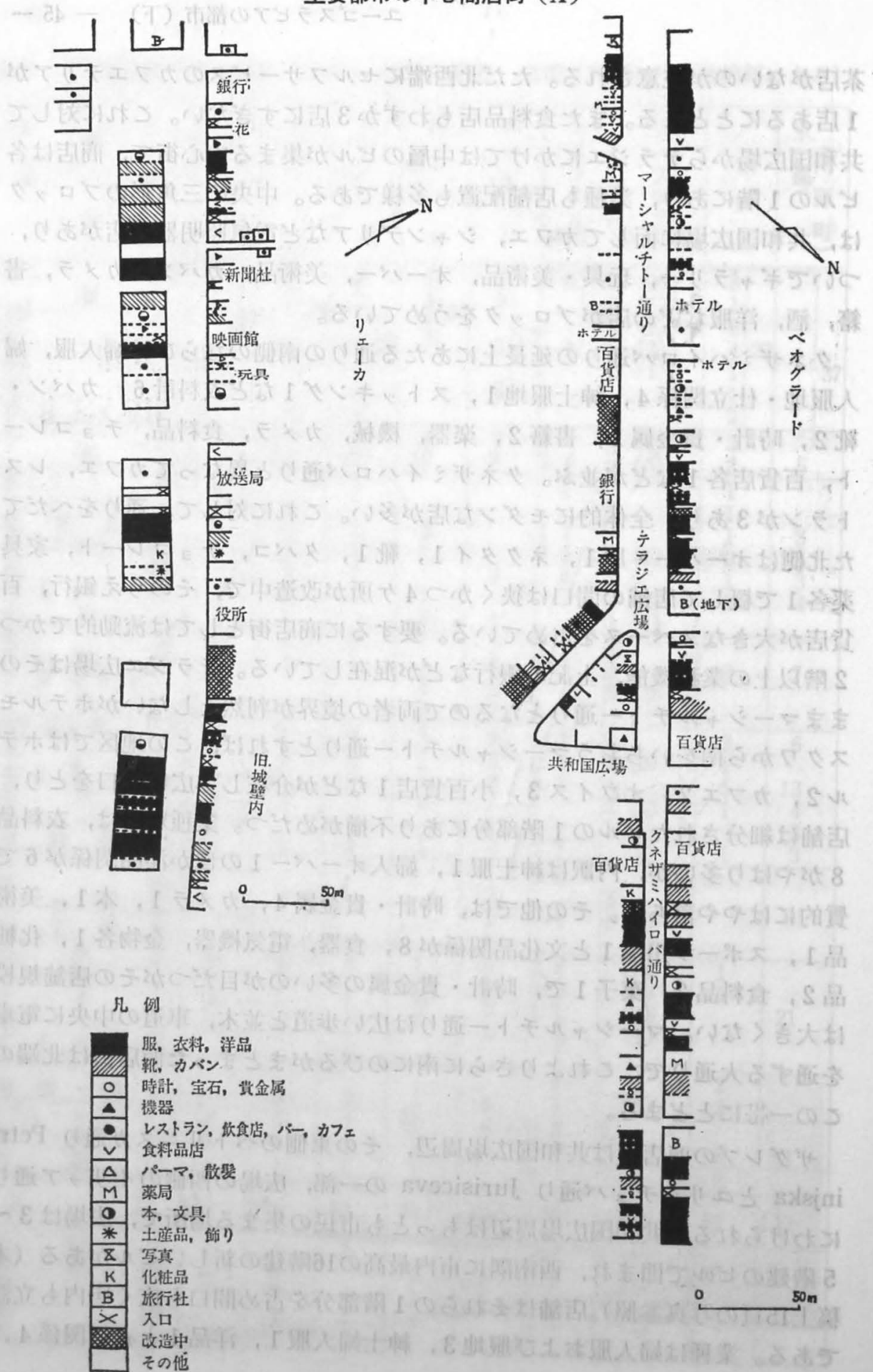
業 種	都 市	ベ オ グ ラ ー ド	ザ グ レ ブ	サ ラ エ ボ	リ エ ー カ	ス プ リ ッ ト	モ ス タ ー ル 新 旧	デ ニ ク デ ュ ブ ロ ブ 表 裏 通	ノ ビ サ ド	京 都 (河 原 町)
洋 服	服 地品子糸具	9 3 7 6 2	16 7 15	9 2 8 13	9 3 1 7	5 3 3 2	5 12 1	2 1 1 1 (9) (1) (2) (2) (1)	8 1 6 4 1 1 2	37
カ バ 靴	靴	8 7	6 14	3 12	1 10	3 8	1 2 4	2 4 (2) (6)	3 2	5
家 具	具 器 度 物 具	2	1	1			1	1	1	
電 機	機 器 調	5 2	4 3 3	2 1 1	2 1		1 1 4	(1)	1 2 1	3 3 4
荒 玩	玩 具	2	3	2	1	2	4	(2)	1	4
薬 化	局 品	4 5	2 4	3 1	1 4 1	2 2 3 2	1 1 1	1 5 5 (10)	2	7
時 計	メ 金 品	7 3	7 4	4 2	3 1	2 3	2 2 1	5 3 (3)	3 1	6
文 術	文 術 品	9 3	11 2	5 1	5 1	2	1 1	4 2 (1)	5 1	13 4
運 動	運 動 品	1	1	1	1	1	1 1	(2)	1	3 3
タ 新	タ 新 品	1				2 1	1 2	3 4 (5) (5)		
食 料	品	5 1	4 1	4	1 1 3	9 4 5 2	2 4 1 1 1	(14) (4) (10) (1)	1 1	21
ワ 菓	子 乳	2 4	1 6	1 1						
ア イ	ス 牛						1 1	(5)	2 3	
ク リ	ン グ		3	3	2	4	1			
カ フ	エ 食 店	6 1	8 8	3 2	10 3	6 5	3 2 2	3 (5)	3	31
百 貨	店	4	2	1	1		1		2	
小 計		110	138	89	74	82	76	(92)	60	143
旅 行	社 所 行 画	1 2 1	1 1 2 4	2 1	2 1 1	1 1	1 1	1 1 (1)	1 1 1 1	
銀 映	ホ	3								

茶店がないのが注意される。ただ北西端にセルフサービスのカフェテリアが1店あるにとどまる。また食料品店もわずか3店にすぎない。これに対して共和国広場からテラジエにかけては中層のビルが集まる中心街で、商店は各ビルの1階にあり、業種も店舗配置も多様である。中央の三角形のブロックは、共和国広場に面してカフェ、シャンデリアなど電気照明器具店があり、ついでギャラリー、玩具・美術品、オーバー、美術品、カバン、カメラ、書籍、酒、洋服などの店がブロックをうめている。

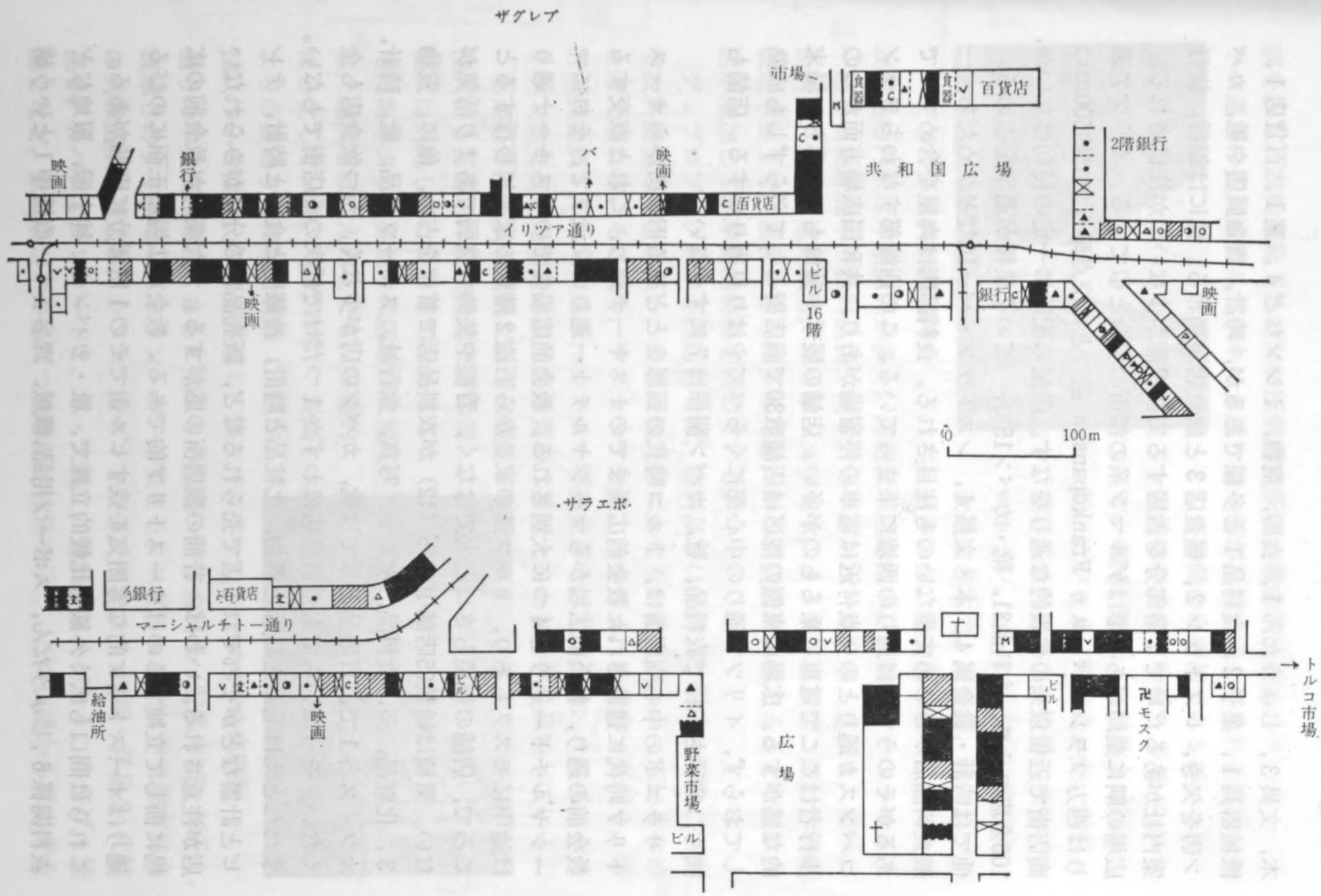
クネザミハイロバ通りの延長上にあたる通りの南側のならばは婦人服、婦人服地・仕立関係4、紳士服地1、ストッキング1など衣料計6、カバン・靴2、時計・貴金属2、書籍2、楽器、機械、カメラ、食料品、チョコレート、百貨店各1などが並ぶ。クネザミイハロバ通りと異なってカフェ、レストランが3あり、全体的にモダンな店が多い。これに対して、通りをへだてた北側はオーバー・服1、ネクタイ1、靴1、タバコ、チョコレート、家具、薬各1で概して店舗の間口は狭くかつ4ヶ所が改造中で、そのうえ銀行、百貨店が大きなスペースを占めている。要するに商店街としては流動的でかつ2階以上の業務機能、上記の銀行などが混在している。テラジエ広場はそのままマーシャルチトー通りとなるので両者の境界が判然としないがホテルモスクワから南をいちおうマーシャルチトー通りとすれば、この地区ではホテル2、カフェ2、オフィス3、小百貨店1などが介在して広い間口をとり、店舗は細分されたビルの1階部分にあり不揃いがめだつ。業種別では、衣料品8がやはり多いが、内訳は紳士服1、婦人オーバー1のほか洋品関係が6で、質的にはやや落ちる。その他では、時計・貴金属4、カメラ1、本1、美術品1、スポーツ用品1と文化品関係が8、食器、電気機器、金物各1、化粧品2、食料品2、菓子1で、時計・貴金属の多いのが目だつがその店舗規模は大きくない。マーシャルチトー通りは広い歩道と並木、車道の中央に電車を通ずる大通りで、これよりさらに南にのびるがまとまった商店街は北端のこの一帯にとどまる。

ザグレブの商店街は共和国広場周辺、その東側のペトリニスカ通り *Petrinjska* とユリシチェバ通り *Jurisiceva* の一部、広場の西側のイリツァ通りにわけられる。共和国広場周辺はもっとも市民の集まる場所で、広場は3～5階建のビルで囲まれ、西南隅に市内最高の16階建の新しいビルがある(本稿上15頁の写真参照)。店舗はそれらの1階部分を占め間口も広く店内も立派である。業種は婦人服および服地3、紳士婦人服1、洋品1と衣料関係4、

主要都市の中心商店街 (A)



主要都市の中心商店街 (B)



(47)

本、文具3、じゅうたん1、食器、荒物、ミシンなど4、薬1、百貨店1、機械器具1、菓子2、食料品1と多様であるが、時計、貴金属店や靴、カバン店を欠き、レストラン2、軽食店3と飲食店が加わる。他には銀行、旅行案内社があるだけで1階部分を占居する業務機能が少ないのが注目される。広場の隅に薬局がある形はゲルマン系の都市の場合と似ている。イリツア通りは西方フランコパンスカ Frankopanska 通りとの交点附近まで約500mの商店街で近世以来の代表的な通りをなす。店舗の配置に一定の傾向はないが、100余店のうち、衣料品31、靴・カバン15で、この2業種が過半を占める。他では時計・貴金属4、本・文具4、レストラン・バー10などがめだち、一般食料品店がきわめて少ないのも注目される。食料品店は肉屋を含めて4であるがそのうち3は通りの西端に集まっている。この西端部すなわちフランコパンスカ通りとの交点付近は電車の停留場があり、共和国広場方面からの歩行者はここで電車に乗るものが多い。店舗の展示や装飾もやや落ち、場末的な感がする。広場の東側の地区は店舗数30で商店街として必らずしも成熟しておらず、イリツア通りの中心部にくらべてやはり見劣りがする。店舗も狭く、業種も多様で衣料品、靴、カバン関係は7にすぎない。

サラエボの中心商店街は、トルコ時代の面影をとどめる旧市街からオーストリア時代に建設された教会前広場までのミスキーナ通り、これと直交する教会前の通り、教会前広場からマーシャルチトー通りの交点まで、それにマーシャルチトー通りと4つに大別される。教会前広場までのミスキーナ通りは途中にモスクもあり、トルコ風の家並から石造2階建の家並に移行するところで、店舗の規模もさほど大ではなく、看板や装飾も貧弱であり活気がない。業種は総数25店舗中48% (12) が衣料品店で首位を占め、他に、荒物3、化粧品、薬、食料品、氷菓子、写真、旅行社、スポーツ用品、靴、時計、オフィス各1で、買廻品としては靴、カバンの店が少なく、かつ飲食店も全くない。そうはいっても食料品店はわずか1つだけで低次の商店街でもない。またたとえば毛糸と時計と置物、化粧品と時計、冷蔵庫と食器と時計、テレビと計器などがそれぞれ1店で売られるなど、販売品目の分化がみられない店が注意される。いわば一昔前の商店街の感がする。ただ薬局が教会前の広場に面して立地するのはオーストリア的である。教会前広場の正面にのびる通りはオーストリア的な雰囲気を残すビル街でその1階部分に店舗がある。これらは間口も広く外観も比較的立派で、靴・カバン4、紳士服、服地など衣料関係6、じゅうたん、スポーツ用品、機械、理容各1、改造中1という構

成を示し、衣料と靴・カバンが圧倒的に多い。教会前広場からマーシャルチトー通りの交点に至るミスキーナ通りは一部が市場広場とみられる広場に面



サラエボの教会前通り

して片側のみ店舗であるが、一般に店舗はやや小で業種も多岐にわたる。総計32中、衣料品9（28%）、靴・カバン6、時計3、薬、玩具、理容、食料品各2、食器、荒物、レストラン、バー、航空会社事務所、改造中各1で、衣料品、靴、カバンが多いが、教会前の通りと異なって

衣料品の内訳は洋品関係が多く、洋服は1店もない。最後のマーシャルチトー通りは総計32中、衣料品10、靴4、カフェ・バー4、本・文具4、菓子、食料品、理容、電気機器、ガソリンスタンド、カメラ、百貨店、銀行、映画、改造中各1で、業種はさらに多様化し、かつ百貨店が出現するとともに飲食店が増加して繁華街的性格を強めている。

デュプロブニクの中心商店街では、衣料品5（10%）、靴・カバン6（12%）で衣料関係の割合が低い、これは観光客にかなりの比重がかかっているためと考えられる。その代り、アクセサリー5、みやげ4、絵葉書・新聞3、時計・貴金属5、本・文具3、カメラ・写真撮影3、美術品2、カフェ・レストラン3など地元消費と観光客消費の二重性をかなり強く反映している。

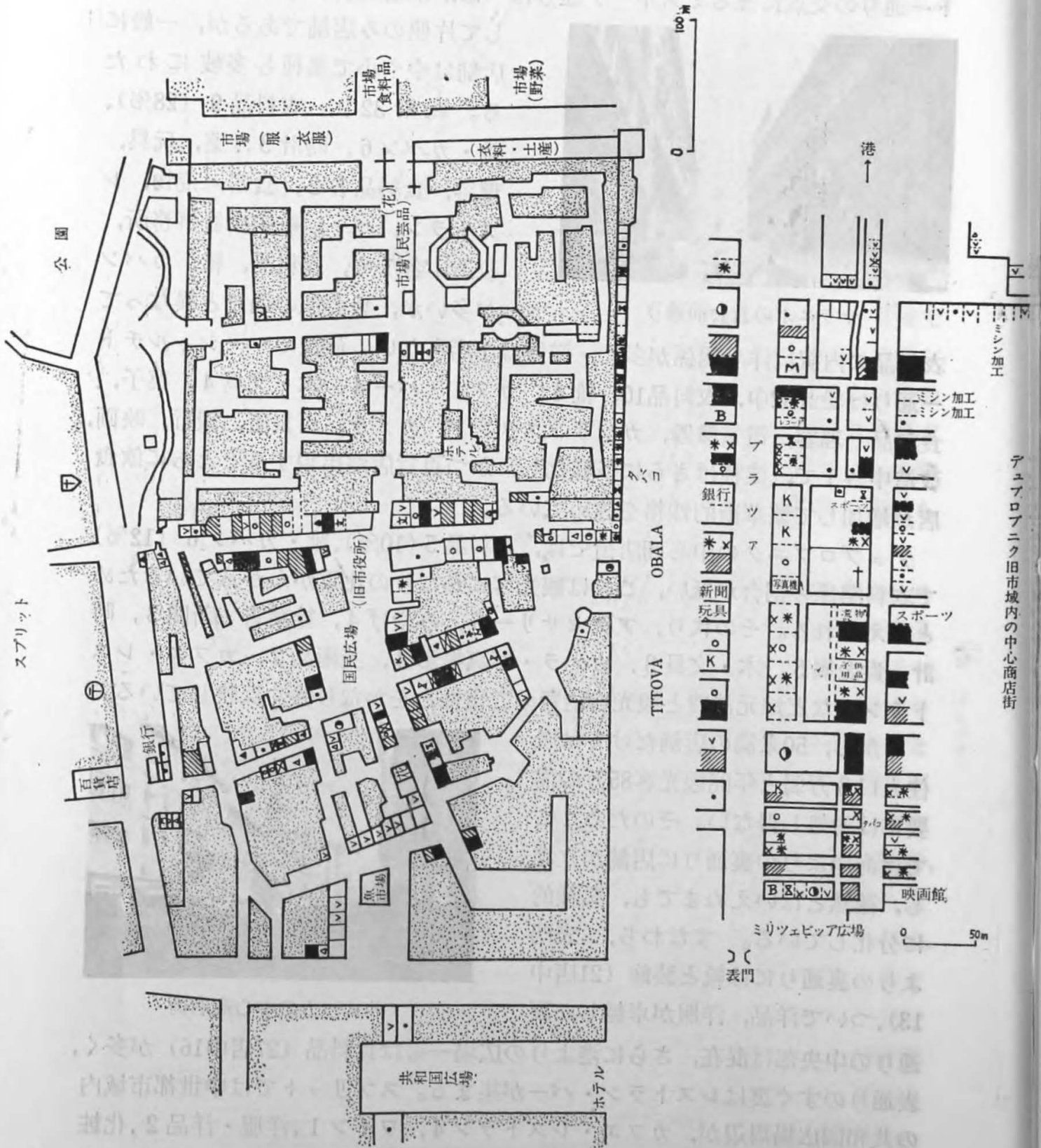
しかし、50未満の店舗だけでは居住人口3万弱と年間観光客85万の需要には対処し得ない。そのためここでは海岸よりの裏通りに店舗が立地し、確然とはいえぬまでも、業種的に分化している。すなわち、表門よりの裏通りには靴と装飾（21店中13）、ついで洋品、洋服が卓越し、裏



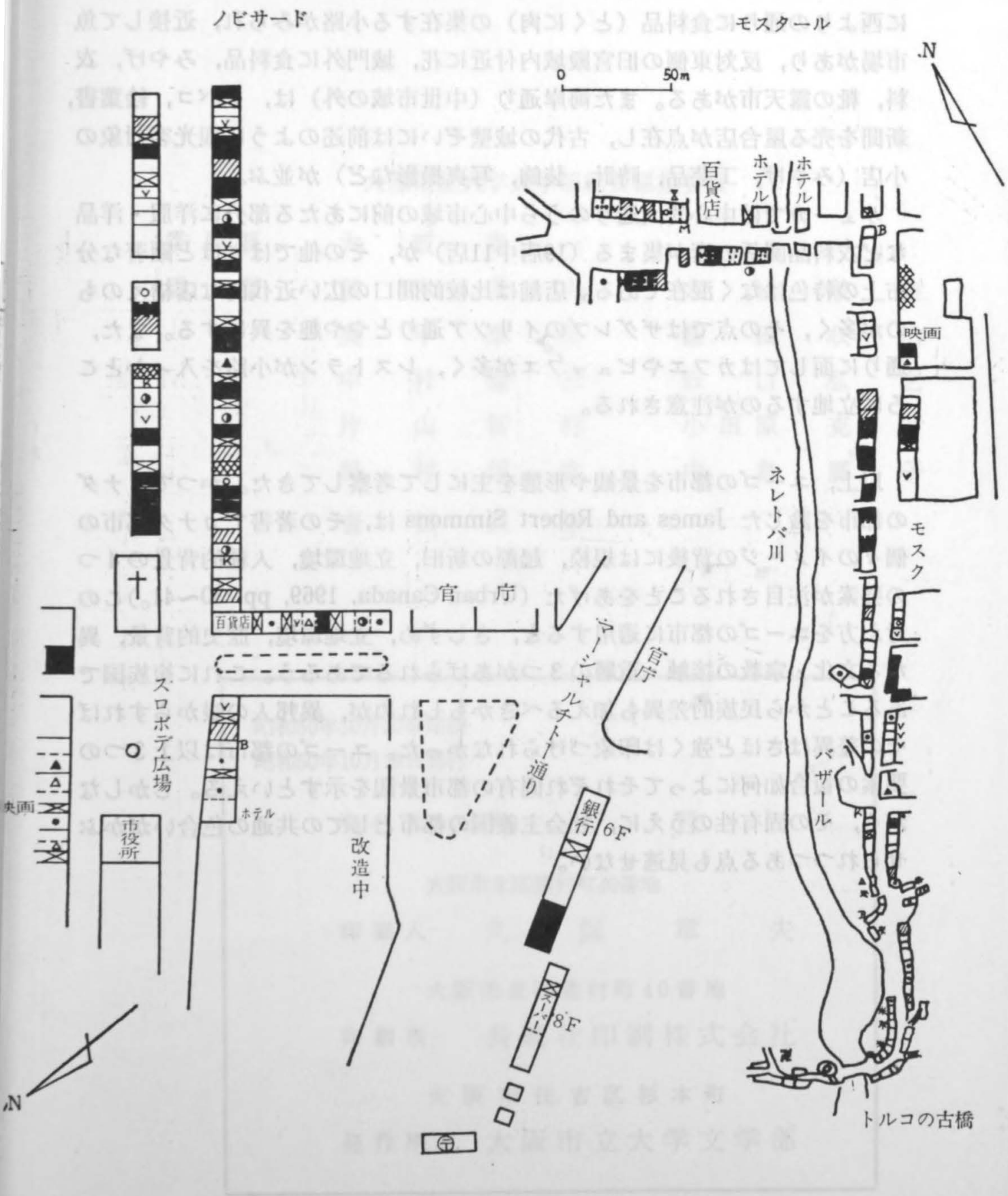
リエーカの中心商店街

通りの中央部は混在、さらに港よりの広場一带は食料品（27店中16）が多く、表通りのすぐ裏はレストラン・バーが集まる。スプリットでは中世都市域内の共和国広場周辺が、カフェ・レストラン4、ワイン1、洋服・洋品2、化粧品2、カバン1、レコード2、本・文具1、食料品スーパー1、みやげ・装飾2など、飲食店がややめだつ繁華街的性格を示し、この広場から派出する

主要都市の中心商店街 (C)



主要都市の中心商店街 (D)



狭い通りは買廻品（衣料，靴，時計，本，機械器具など）が混在する。さらに西よりの通りに食料品（とくに肉）の集在する小路がみられ，近接して魚市場があり，反対東側の旧宮殿域内付近に花，城門外に食料品，みやげ，衣料，靴の露天市がある。また海岸通り（中世市域の外）は，タバコ，絵葉書，新聞を売る屋台店が点在し，古代の城壁ぞいには前述のように観光客対象の小店（みやげ，工芸品，時計，装飾，写真撮影など）が並ぶ。

リューカでは中心的大通りのうち中心市域の前にあたる部分に洋服・洋品など衣料品関係の店が集まる（19店中11店）が，その他ではさほど顕著な分布上の特色はなく混在である。店舗は比較的間口の広い近代的な店構えのものが多く，その点ではザグレブのイリツア通りとやや趣を異にする。また，通りに面してはカフェやビュッフエが多く，レストランが小路を入ったところに立地するのが注意される。

以上，ユーゴの都市を景観や形態を主にして考察してきた。かつてカナダの都市を論じた James and Robert Simmons は，その著書でカナダ都市の個々のイメージの背後には規模，起源の新旧，立地環境，人種的背景の4つの要素が注目されることをあげた（Urban Canada, 1969, pp. 30~41.）この考え方をユーゴの都市に適用すると，さしずめ，立地環境，歴史的背景，異なる文化・宗教の接触・重層の3つがあげられるであろう。これに複族国であることから民族的差異も加えるべきかもしれぬが，異邦人の眼からすればその差異はさほど強くは印象づけられなかった。ユーゴの都市は以上3つの要素の複合如何によってそれぞれ固有の都市景観を示すといえる。しかしながら，その固有性のうえに，社会主義国の都市としての共通の色合いがかぶせられつつある点も見逃せない。